

## <公開シンポジウム「変わる初等中等教育の学びと大学初年次教育」>

### パネル・ディスカッション

#### 【パネリスト】

五十嵐俊子(日野市立平山小学校校長)

小島昭彦(神奈川県立藤沢清流高等学校総括教諭)

今野貴之(明星大学助教)

安永 悟(久留米大学教授・初年次教育学会会長)

安西祐一郎(独立行政法人日本学術振興会理事長・前中央教育審議会会長)

#### 【司会】

菊地滋夫(明星大学教授)

#### 菊地

これより、パネルディスカッションを始めます。論点は多岐にわたるかと思いますが、あまり話が拡散しないようにしたいと、私が三つほど論点を考えました。すなわち、1) アクティブ・ラーニングの導入、2) ICTの積極的活用、3) 大学初年次教育と社会、この三つです。第3の論点では、初等教育から中等教育までの学びが今後急速に変わりつつある今、従来の学びから、多様な他者と協同して問題を見つけ、解を見いだしていくアクティブ・ラーニングへと変わっていく中で、大学教育の起点としての初年次教育は今後どのような役割を果たしていくべきかを、社会との関係を視野に入れながら考えたいと思います。

まず一つ目の論点、アクティブ・ラーニングの導入について、五十嵐先生、小島先生、今野先生、安永先生の順にうかがいたいと思います。

今野先生の報告でも強調されていたように、教育とは文化ですから、単に技術として他の文化の中に移し変えられるわけではありません。試行錯誤を重ねながら熟成させてきた、さまざまなアクティブ・ラーニングが、日本にもあると思います。他方で外来のものがありますが、そういうものは日本には馴染まないのではないかと、アクティブ・ラーニングの導入に疑問を持つ方がいるようです。あるいは、児童・生徒、学生には歓迎されるものの、教師として慎重な見方をされる方が会場にもいらっしゃるかもしれません。

形式的、表面的なアクティブ・ラーニング技法の導入にならないようにするためには、何が必要か。安永先生からもお話がありましたが、この点についてお考えをお聞かせください。それでは五十嵐先生、お願いします。

#### 五十嵐

形式的なものになる傾向があるという危惧が、先ほどからたくさん出されています。アクティブ・ラーニングがなぜ必要なのか、それによってどのような力をつけるのかを、最初にまず明確にしておかないと、形式をただ真似ることが目的化してしまうと思います。つまり、アクティブ・ラーニングを導入する狙いをしっかり把握することが重要になると、私は考えます。

そこで問題は、指導者側はつい説明調になってしまうことです。それではいけないと分かっているながら、延々と話してしまうことが珍しくありません。今年の7月に日野市で行われた校長先生への研修では、アクティブ・ラーニングをなぜ取り入れるのかというテーマについて、参加した校長先生同士が何人かでチームを組んで話し合いました。アクティブ・ラーニングを導入する狙いをそれぞれの学校ではっきりさせやすくするために、まず校長先生に考えていただくというわけです。

#### 菊地

なぜアクティブ・ラーニングでなければならないかという、頭で考えただけではなかなか分からないことを、校長先生が体験的に学ぶ機会を設けているということでしょうか。

続いて小島先生、いかがでしょうか。

#### 小島

アクティブ・ラーニングが日本の文化や社会、風土に馴染むのかということですが、実はあまり意識せずに導入してしまっただけで、生徒もあまり抵抗なく受け入れていますから、正直そこはあまり考えていませんでした。形だけのアクティブ・ラーニング技法の導入にならないためにできることとしては、今、五十嵐先生がおっしゃいましたし、私も先ほどお話ししたのですが、意義・目的を生徒にしっかり理解させ、さらに、授業は「安全・安心の場」であることを生徒にしっかり染み込ませることが重要だと考えます。そうすれば、生徒は自ずと授業に積極的に取り組むようになっていくと感じています。そのほかには、先ほどお話ししたように授業デザインの仕方やグループ分けの工夫、あるいは振り返りの活用も、ポイントになると考えています。

#### 菊地

では、東南アジア、南アジア、中東、さらに来年はアフリカも調査される予定の今野先生から見て、いかがでしょうか。アクティブ・ラーニングは日本に馴染むのでしょうか。形だけにならないためには何が必要でしょうか。

#### 今野

まず、日本の文化に馴染むのかどうかということに関しては、馴染むと思います。そもそもアクティブ・ラーニングという言葉が一般的になる前にも、学校種を問わず、小学校、中学校、高校、大学それぞれで、今日アクティブ・ラーニングと呼ばれる活動を実践してきた先生方がいます。ということは、呼び方が変わったに過ぎません。どの先生も行ったわけではないでしょうが、もともとアクティブ・ラーニングであれ、今話題の反転授業であれ、昔からずっと行っている先生方は日本にもいます。そうした点から見れば、日本の教育文化にも適する内容なのではないかと考えられます。

次に、形だけの技法にならないようにするためには何をすべきかについては、現場の先生方に頑張ってもらいたいと思いますが、それだけでは投げやりになってしまいます。小学校、中学校、高校では、校長先生のリーダーシップが欠かせないでしょう。そこで校長先生には、中間的にビジョンを掲げ、「こうやっていくんだ」と校内に示していただきたいと思います。さらに、校長先生や副校長先生、教頭先生といった管理職の先生方には、現場の先生方が取り組もうとしていることを認めてあげてほしいと思います。また、大学ではアクティブ・ラーニングを進めようという仕組みを整えることが、形だけに陥らないようにするために必要だと、私は考えます。

## 菊地

アクティブ・ラーニングに興味のない先生、またアクティブ・ラーニングに接する機会がなかった先生にとっては、外国から突然入ってきたもののように感じられるかもしれないけれど、力を入れている先生方が以前から実は大勢いらっしゃったということですね。また、現場の先生の努力プラス、トップのリーダーシップなどもポイントであるというお話でした。ありがとうございます。

では安永先生、お願いします。

## 安永

いま、今野先生からお話がありましたけど、日本の多くの先生方はアクティブ・ラーニングに取り組んできたという現実があります。日本での実践研究の結果が欧米に入り、それが近年あらためて日本に入ってきたのだと考える方もいるほどです。

アクティブ・ラーニングが日本の文化的、社会的風土に馴染むかということですが、私は馴染むと思っています。例えば、日本人には「和の精神」というものがあります。江戸時代に「江戸しぐさ」という言葉がありました。ああいうふうなものが日本人の根底にはあると、私は思っています。「江戸しぐさ」とは、相手のことを思い、自分のことを思い、お互いがうまくやっていくために江戸時代にでき上がったものです。それを展開して、「気が利く尺度」という尺度を作成した卒業論文が私の研究室にあります。「あの人、気が利くよね」というものを測った論文です。「気が利く尺度」で得点が高い人は、協同的な活動に対して非常にポジティブで、さらに授業の成績も対人関係も良い。こういうことから、アクティブ・ラーニングは日本人に馴染むだろうと考えます。もう少し言うと、いま、アクティブ・ラーニングが外国から入ってきたことは間違いない側面があるので、それをいかに日本人に馴染むようにしていくかが課題でしょう。形だけのアクティブ・ラーニング技法の導入にならないためには、先ほどお伝えしたように、技法としての協同学習ではなく、教育理論、教育思想としての協同学習を学んでいただきたい。そうするとかなりうまく取り入れられるのではないのでしょうか。

## 菊地

小島先生にうかがいます。小・中学校では、アクティブ・ラーニングがかなり取り入れられていると言われます。今、大学入学者選抜と連動する形で、高校にアクティブ・ラーニングがどの程度浸透するかが注目されています。一口に高校と言っても、非常に多様です。公立・私立の違いがありますし、もちろん入学してくる生徒の個性も一様ではありません。また、卒業後の進路も多岐にわたります。小島先生は県立高校の先生として、つまり教師の異動がある環境で、アクティブ・ラーニング型授業の定着に向けて組織的に奮闘されています。高校、特に公立高校の風土や環境の中でアクティブ・ラーニングを導入することについて、どのように考えておいででしょうか。あらためお聞きします。

## 小島

私が勤務する藤沢清流高校は神奈川県内の公立高校の一つですが、神奈川県全体、いわば「チームかながわ」として取り組める体制をつくりたいと、私は思っています。管理職の重要性については、今野先生からも五十嵐先生からもお話がありました。ただ、私たちの実践がうまくいっている要因は、ひょっとしたら現場の教員から動き始め、互いに支え合おうとしているところにあるのではないかという気がするのです。もちろん、私たちの取

り組みを管理職が支えてくれないとうまくいきませんから、管理職による後押しや助言は大切であり、ありがたいことだと思いますが、いつも教育委員会や校長に言われたことをトップダウンで進めるという空気になると、教員の間で、いわゆる「やらされ感」が強まり、なかなか進展しないということになりかねないのではないのでしょうか。私は自分の取り組みを組織的という言葉で表現していますが、それは、私が抜けても学校で研究を推進していけるという意味です。そのため、核となる教員が校内で何人も生まれるよう取り組んでいます。

#### 菊地

では、今のところは順調であると理解してよろしいでしょうか。

#### 小島

必ずしも順調とは言えません。やはり教員による温度差はあります。特に導入1年目はそれなりに抵抗もあり、「新しいことをするのは面倒くさい」といった意見が少なくありませんでした。ただ、初年度の5月初めに、教員が生徒役となり、アクティブ・ラーニング型授業を体験するという研修を行ったところ、「自分が普段行っている授業を少し工夫すればできる」、つまり「何ら特別なものではないのだ」という雰囲気が生まれました。

#### 菊地

五十嵐先生にうかがいます。小島先生の実践は、トップダウンではなく、現場の先生方が「みんなでやろうよ」と言って発展させてきました。そして、トップがそれを妨害したり無視したりするのではなく、支えるという、このあたりがアクティブ・ラーニングの導入の鍵になるのではないかと思います。今野先生がおっしゃったリーダーシップにも関係しているでしょう。校長先生という立場として、五十嵐先生はどのようにお感じですか。

#### 五十嵐

トップダウンということではなく、組織の上位にいる者は新しい情報を素早く収集できるように、アンテナを高くしている必要があるでしょう。そして、その情報を伝える義務があると思います。そのうえで、「うちの学校の子はどうなんだろう」「何が足りないんだろう」「十分できているね」「自慢したいよね」というコミュニケーションが生まれ、頑張ろうということになっていくわけです。今学校は、「あれをやれ」「これをやれ」と多分野にわたって求められていることが多くありますが、効果的であると言われていたこと全てに取り組むのは現実的に不可能です。そこで、本当に大切なことをいかに皆で考えていくかというマネジメントが管理職には必要だと、私は考えます。

#### 菊地

では、次の論点、ICTの積極的活用に進みたいと思います。本日の報告では、五十嵐先生がICTの積極的な活用について映像を交えて具体的に伝えてくださいました。では、中学校や高校、大学ではどれほど活用されているのか、あるいはこれから活用される可能性があるのかを、考えてみたいと思います。

初等中等教育から大学教育への連続性、ICTの積極的活用の可能性について、ご意見をうかがいます。小島先生、高校での現状や展望はいかがでしょう。

#### 小島

ICTの活用については、おそらく公立か私立かによって、さらに都道府県によっても、かなり差があるでしょう。言いにくいことですが、神奈川の県立高校は予算が厳しく、活

用が十分に進んでいるとは言えません。正直、五十嵐先生の日野市立平山小学校にうらやましさを感じます。

神奈川の県立高校では、現在1校あたり9台ずつタブレットが配られています。まだまだ十分な台数とは言えませんので、それをどのように授業等で活用するか、研修等で学んでいるところです。教員によっては、スマートフォンを使ってプロジェクターに映し出すといった活用の工夫をしていますが、新しい機材を取り入れるのは予算的に困難です。本校では、教室にプロジェクターやパソコンがないため、授業で用いるパソコンは、教員が職員室から教室に持ち込んでセットし、授業が終わったら職員室に持ち帰っています。

### 菊地

今後、ICTの活用について中等教育あるいは大学教育に何を期待するか、五十嵐先生にうかがいます。小島先生が言及したお金の問題は避けて通れないかと思いますが、いかがでしょうか。

### 五十嵐

神奈川県内の公立高校にエールを贈ります。ただ、日野市は決して裕福ではありません。そのため、アドバイザーとして信州大学教育学部の東原義訓教授をお招きし、ICT活用推進体制をつくるなど、長年頑張ってきました。推進体制が発足した頃、教育委員会にいた私も及ばずながらサポートに努めたつもりですが、指針をしっかり示し、ICTを活用することの必要性を繰り返し首長部局に訴えてきました。

ICTにどれだけ予算がつけられるかは、自治体によって差があるでしょう。環境によって、子どもの力に磨きをかけられなくなるのは望ましいことではありません。また、学校種による意識の差もあると思います。小学生だってかなり頑張れるのに、中学や高校でトーンダウンする、質が低下するのは残念です。教員養成についてももっと大学教育で研究していただきたいと思います。

ICTを活用して生きる力を磨かれた子どもたちが、将来、社会に出ていけば、「なぜ教育環境がこんな状況なんだ」という声を高められるはずです。

お金の問題については、社会全体の責任ではないかと思っています。

### 菊地

続いて今野先生にお聞きします。五十嵐先生のお話のなかには大学教育への言及がありました。今野先生はご自分の授業でもICTを活用していると思いますが、ご自分の事例、他の事例の現状をどのように見ておいでですか。また、これからの展望についてもお願いします。

### 今野

今、教員養成大学でもっと頑張ってもらいたいというお話を聞いて、確かにそれはあると思いました。私が指導している学生の9割は教師を目指しています。「小・中学校、高校で受けた授業はどのような形態でしたか」と学生に質問すると、一斉授業による暗記や暗唱だと答える学生がほとんどです。「ちょっと違った、記憶に残っている特徴的な授業は何か」と尋ねても、挙がるのは「理科の実験です」「校外に出て観察をしました」といったところです。これが現状です。「学校にプロジェクターはありましたか」「電子黒板はありましたか」と問えば、ほとんど手が挙がりません。プロジェクターや電子黒板があったと答える学生は、90人中2人ほどでしょうか。ただ、文部科学省の調査結果では、これほ

ど少ない割合ではないでしょう。ということは、小・中学校、高校の先生方が、ICTを用いた授業を展開してはいないのではないかと気がします。その理由はさまざまでしょう。ただ、自分がアクティブ・ラーニングも、ICTを活用した授業も受けていないため、教師になった時にそうした授業が行えないということはあると思います。自分が経験していないことは、他者に伝えられないからです。これは、大学の教員にも当てはまると思います。

アクティブ・ラーニング型授業を体験する研修を行ったら、その導入に消極的だった先生方が普段の授業と似ていることに気づいてくれたというお話が、小島先生からありました。ここに大きなポイントがあると、私は考えます。学校種を問わずどの先生方も、自分で体験してみる必要があるのではないのでしょうか。

もちろん、いきなり全ての授業をパソコンやタブレットを用いるのは無理でしょう。正確な知識をしっかりと伝える必要がある状況では、説明しなければなりません。ただ、児童生徒、学生に発見してほしい、気づいてほしいことがある内容では、その手立てを用いて授業を展開すべきだと思います。それを1人で行うのは無理があると思います。他の先生方の授業を見学することは自分自身の授業を振り返るうえで大切なことです。そこで私は、自分の授業を批判してくれる人を持つように、学生に繰り返し伝えていきます。また、互いに批判し合えるような授業を実践しています。

#### 菊地

タブレットをただ配ればよいわけではなく、何のために使うのか、教師がICTを用いる意図をしっかりと把握する必要がある。教師同士の学び合いのきっかけにするためには、互いに批判し合うことも必要なのではないか。そういうお話だったと理解しています。

安永先生、ICTの積極的活用についてのコメント、もしくは先生方への質問がありましたらお願いします。

#### 安永

ICTについて私は、スライドを積極的に用いるくらいのことしかしていないのですが、スライドが使えるような学生に入学してきてほしいとは思っています。さらに、さまざまなスキルを身につけた学生が育ってきてくれれば、私としても助かると思います。

また、小・中学校や高校に足を運ぶと、ICTの環境に差があることも実感します。予算による差はどの世界にもあることながら、改善すべき問題であることは確かです。

#### 菊地

小・中学校、高校については、機材を教育委員会に買ってもらうのも必要なことかもしれません。

安西先生はいかがでしょう。

#### 安西

ICTは私の専門ですが、自分から主体的にICTを学ぼうとする時、普通、何をやるのでしょうか。ICTは、情報を収集する、良い情報とはどういう情報なのかを考える、先生や友だちとコミュニケーションをとる、宿題をするときに工夫するというように、さまざまなところに自分がかかわっていくためのツールです。授業で用いることはもちろん重要ですが、自分の持つ情報を整理・蓄積していくことも大切です。お金がかかるのですがすぐに実現させるのは難しいでしょうが、将来は授業の中にセットして使うというよりも、ユビキ

タスにいつでもどこでも自分から学ぶことができるための非常に重要にツールになってく  
るのではないだろうかと思います。すると、ワイヤレスの環境をどう考えていくのか、セ  
キュリティをどう見ていくのか、あるいは小・中学校で情報リテラシー、つまり「すべき  
こと」と「してはいけないこと」とをいかに区別していくかが気になります。こうしたこと  
は文化であり、学びのためのツールとして自然に入ってくるような文化をつくっていくこ  
とが大事だと思っています。

## 菊地

ありがとうございます。では三つ目の論点「大学初年次教育と社会」に進みたいと思  
います。ここでは社会との接点をどのタイミングで設けるべきかについて検討していきたい  
と思います。

安西先生の基調講演では、入学したばかりの1年生の春前期に初年次教育の一環として  
社会との接点を意識させるということは、実は、企業の青田刈りを助けるということでは  
なく、主体性を引き出すうえで非常に重要だというご主張でした。しかし、それに対して  
はこのような見方もあるかもしれません。多くの大学学部教授会で反対にあったというお  
話がありましたが、「学問の探究を通して深く多角的に考えていく、考え抜く、そういつ  
た学びを進めていくこと自体が、社会に求められる力を培うことになるのではないか。産  
業界の人を1年生とペアにする必要はないだろう」といった意見にぶつかったというお話  
でした。この点については、学生の方から「大学での学びとは、必ずしも市場の範囲内の  
ことだけではないのではないのか。それ以外のことについても大学での研究は対象としてい  
る。入学したときに産業界を持ってくるということは、どうしても企業のロジックに反応  
する学生だけが育ってしまうという弊害はないだろうか」というご意見をいただしてい  
ます。

この点につきまして、安永先生と安西先生とで意見交換をお願いしたいと思います。ま  
ず安永先生、いかがでしょうか。

## 安永

安西先生の実践については、私は大賛成です。私なりの解釈をお話ししましょう。

私は1年生の最初に4年間の見通しを伝えます。大学に入学して、いろいろな授業が  
あって、大学での学びにおいて最終的にどこまでいくのか、それをまずきちんと伝えるこ  
とにしています。学生に、4年間の見通しを持たせ、ステップごとに何をやればよいのか  
をイメージさせています。そのなかで、1年後にはどこまでできていけばよいのか、半年  
後はどうか、この授業が終わるまではどうかと、自分がいつまでに何をすべきかを逆算的  
に考えさせています。

こうした取り組みを、大学の教師が学内でしなければならなくなる。そのために大学に  
はカリキュラムがある、ということはいくら強く言ってもなかなか伝わらないところがあ  
ります。安西先生が企業を持ってくるということは、それをポンと外から入れていただく  
ことで、とても大きなインパクトがあるはずです。つまり、「現実社会はこうことなんだ」  
ということをもっと知ってもらうことは、学生に4年間の見通しをもたせることを重視して  
いる私にとってはプラスになります。私は1年生の前期10コマ目あたりから外部のかたを  
招き、講演をお願いしていたことがあるのですが、そこには同じ意図があったと思います。

もう一つは、学問探究についてです。私は、こういうことを学生に言っています。私達

は心理学科です。当然、あなたたちを育てるメインの教師は心理学科の教師なんだ、と。心理学科の教師は、心理学の研究論文を書いて大学の教師になっています。だから、大学の中で私たちがあなたたちに教えられることは、心理学の論文がしっかり書けるようにすることを通して、教育を行うことしかできない。むろん、研究者は対外的にも研究しているんな所で活動していますが、その研究者ができることを、まずできるようになってほしい。そのうえで、さらに先に進んでほしいということがポイントなのです。

そしてもう一つは、就職活動です。学問探究と就職活動の二つを、心理学の学生はどう乗り切っていくのか。1年生のときに、外部から人が来て、「こんなことをしないとイケないんだ」ということを目標として、動機づけとして分かったとしても、4年後の卒業までをつなぐ大学4年間の講義全部を外部の方にお問い合わせすることはできません。そのため、教師は企業の方にもらった情報と、私たちができるものをつないでいながら、「外部の方たちが言っているこういう世界は、自分の研究の世界とつなぐことができ、役立てることができる」と考え、例えば「1人で物事を考えても、良い仮説は浮かばないよね」「1人で実験するのは大変だから、みんなに手伝ってもらおう」といった、協調のようなことは教えていきたいと考えています。

大学で学生を4年間育てる主体は私たちですから、それを最大限活かしながら、外部の方たちの共通項とうまく関連づけながら、バトンタッチしていく。そこで衝撃を受け、目を覚まして頑張ろうという気ができて、それを私たちが受け継いでいろいろ工夫しながら、社会に対して……。そういったところがあるのかな、と。その一番最初は、1年生の春がいいかなあという感覚をもっています。

## 菊地

安西先生、いかがでしょうか。

## 安西

安永先生がおっしゃる通りだと思います。

実際のFSP研究会の追跡調査によると、その講座を受けた学生は夏になって何と言うかという、「これから学問をしなければだめだ」「学問がしたい」と言う学生が多いのです。これは大事なことで、最初に企業の人 came からといって、企業に席卷されてしまうというわけではありません。むしろ、「社会とはこういう人たちが苦勞してつくっているところなのだ」「将来自分がそういうところに入っていくとしたら、大学のこれからの3年半は、一生懸命勉強しなければいけないのだ」と、そういう学生が非常に多いということです。

また、これからの時代は世界も日本の国内もいろいろなことが大きく変わっていくと思います。そうした時代や社会を生きていく若い人たちは、何を身につけているべきでしょうか。それは、自分から学びに行く姿勢、さらにその姿勢を早くから持たなければならぬという気持ちだと、私は考えます。そのことを伝える手段の一つとして、企業の方に来ていただいています。さまざまな企業がありますから、場合によっては魂胆があって入ってくるかもしれません。大事なものは、外部の人たちと中の人たちとの信頼関係がしっかりできているかどうかです。それを構築してくるのに苦勞もありましたし、時間がかかったということ、ぜひ、ご理解いただければと思います。



## 菊地

安永先生と安西先生のご意見を踏まえ、大学で初年次教育を担当されていらっしゃる今野先生にお聞きしたいと思います。

新入生が企業に全て席卷され、都合のいい人材になっていくわけではなく、むしろ主体性が育って、必然的な帰結として批判的な思考も伸びていく可能性が示されたかと思いますが、この点、いかがでしょうか。

## 今野

企業にとっていいとか、大学にとっていいではなく、学生にとって考え方を学ぶ場になるのが一番なのかなと、私は考えています。考え方というと、文部科学省が示している思考力です。その思考力を育てるために何をすべきかを考えましようかと、よく言われます。多くの先生が考えるという言葉当たりまえのように使っていますが、私は、「具体的に何を考えたら、考えることになるのでしょうか」と思ってしまう。「考える」ということを、もっと具体的に分解して考える必要があると思います。例えば、比較する、分類する、アイデアを出すというように、具体的な動詞に落とし込むような考え方を知ることが第一のステップだと思います。その考え方を身につけていくと、具体的に今自分の目の前で起こっていることを分析できるようになるのではないのでしょうか。

## 菊地

では、本日ご来場の皆さまと、さらに検討を深めてまいりたいと思います。

論点は三つですが、この論点だけでカバーしきれない点についても、質問していただきますと幸いです。

まず、アクティブ・ラーニングの導入について、いろいろな話が出てきましたが、ご意見やご質問のある方、手を挙げていただけますでしょうか。

## 質問者1

興味深いお話、ありがとうございました。私自身、アクティブ・ラーニングをやっていますし、そういう構成もわかっているという前提であえて質問させていただきます。アクティブ・ラーニングというのは、教員がお膳立てをしていて、ほんとうに子どもたちが自主的にアクティブになっているかという点で考えると疑問に感じるんです。アクティブにさせられているといったほうが正しいのかもしれない。アクティブ・ラーニング型の授業でないときにも、自主的に積極的に学ぶ力が培われているのかということを検証しない限り、アクティブ・ラーニング型授業では能動的になっているけれども、そのほかのときには目が死んでいるとかではしょうがないわけですね。そのあたりのことをどう検証していくのかと、学校で示すと大体どのあたりからほんとうの意味で自主性・主体性をもっと重視すべきか、ということについてご意見をうかがいたいと思います。

## 菊地

ありがとうございます。

では安永先生、お願いします。

## 安永

アクティブ・ラーニングの技法というのは、確かに話せない学生がいることを前提に、どううまく話させるかということで手立てを準備しています。ゼロからのスタートなんです。しかし、いつまでも強い構造化のままでいて、やらせればできるけどそれを抜いて

しまうとできないという状態はまずいわけですね。そこで何を考えるかという、仲間と一緒に学ぶことはすてきなことだ、頑張っで学ぼうという気持ち、協同の精神ですね。それが徐々に強まって、それに応じて構造化を抜いていく。協同の精神の育ちと構造化の程度のバランスを常に意識しながらやっています。

小学校から上がって行って、どのへんでどうすればいいか。これは子どもたちによって全然違います。指導しているなかでどれだけ子どもたちの主体的な学びが獲得されていくかを常に意識しながら、見とりながら抜いていく。それをやればどの段階からでもできることになります。

### 菊地

小島先生が用意してくださった資料には、「3年生になるとアクティブ・ラーニングはあまりよくないなあ」という見解があるようですが、その点も含めましていかがでしょうか。

### 小島

1年次からアクティブ・ラーニング型授業を導入していますが、3年次になるとアクティブ・ラーニング型授業に対する期待や要求のレベルが高まった分、生徒の評価も厳しくなっているのではないかとというのが一つの見解です。この点については、引き続き検討課題にしているところです。

ご質問のあった点ですが、今日、振り返りの話をしましたが、私たちは振り返りをもってその時間の学習を完結させてしまわない、ということを考えていまして、その授業の延長線上で、生徒たちが発展学習的に課題に取り組むとか、あるいは関連のテーマについて考察するというような機会ができるとよいと思っています。それはあくまでも強制ではなく、さらに学びを深めていきましょうという投げかけなのですが、それに対する取り組みをする生徒が少しずつ現れてきていることは、一つの成果なのかなと考えています。

もう一つは、「安全・安心の場」という言葉を今日、何度も使っているのですが、授業中そういう空気の中で、「お互いに相手の意見をしっかり受け入れる」、「相手を認め合う」、「間違いがあってもそれがグループに貢献する」とか、そういうことを繰り返していくうちに、今度はそれが学級活動や部活動など授業時間以外の場でも、チームとしてお互いを支え合う点で、生徒の態度や行動が変化していると教員間でも話題になってきています。ただ、そういった変化を数値化するのが難しいのも事実です。

### 菊地

では、ICTの積極的活用について、ご意見・ご質問がある方、挙手をお願いします。

### 質問者2

こんにちは。明星大学人文学部国際コミュニケーション学科4年生の武富拓也です。今日は貴重な意見をたくさん聞かせていただいて勉強になりました。先ほどICTを積極的に活用するためには、国の予算だとか教育的費用には限界があるので、なかなか導入に至らないというお話がありました。逆に言えば、それは全ての先生たちにタブレットを使用させる練習をさせるとか、この学びに対してまだ理解が追いついていない先生たちに協力をさせるというような費用が大きくかかるのかなと思います。今は学校教育の場以外でもかなり質の高い学びを受けられるところがたくさんあります。例えば、塾(トライ)です。塾講師が毎月980円でトップクラスのものを教えている、塾(トライ)はゼロ円の教育を

教えている。こういうものを活用すれば、たくさんお金を使わなくても効率的で質の高い教育ができると思います。学校教員の情報を伝達するという仕事は激減するし、より生徒に対して学びを与えていくことができると思うんですが、その点についてはどうお考えですか。長くなって申しわけありません。

**菊地**

五十嵐先生、お願いします。

**五十嵐**

今後、子どもたちに1人1台の環境を整備することは困難だと思います。何年かすると家にあるものを持ち込むという可能性があります。BYOD時代の到来です。それに合わせて学校は多様なパソコンにできる限り対応するという形になると思うのですが、それに向けて研修を進めているところです。単なる操作研修ではありません。子どもたちにどんな力をつけて育てるかという視点を落としてはいけません。企業でやっているものとは違うかもしれません。

またいろいろ学ばせてもらいたいと思います。若い人たちの力はすてきですから頑張ってください。

**菊地**

もうお1人。申しわけありませんが単刀直入にお願いいたします。

**質問者3**

先ほど、学んだ者でないと教えることができないというお話があったのですが、いま大学の教員が積極的にICTを学ぶ場があるのでしょうか。

**菊地**

今野先生、お願いします。

**今野**

ICTを活用する学ぶ場があるのかということですが、具体的な操作方法については各大学に任されている状況です。しかし、授業のつくり方を学ぶということは、別の学会、たとえば日本教育工学会では、研修会や研修終了証などを発行するような形も出てきていますので、大学の教員にも学ぶ場は用意されていると答えられると思います。

**質問者3**

それをもっと積極的にアピールしないと、ここに来て積極的にやろうと思っているけれども取っ掛かりがない。そういう場をこの学会でもやるべきではないかと思います。

**菊地**

ご意見ありがとうございます。では、この問題は触れないわけにはいきません。大学初年次教育と社会の関係についてです。

**質問者4**

企業の方を大学初年次に入れて、やっぱり学問をしなければいけないということを学生に実感させるというのは共感します。私は経済学部ですが、経営学部だとマーケティングとか会計とかだと思うのですが、文学部でシェイクスピアをしっかり勉強しないといけないとなるのかというと、逆に文学部は必要ないねという方向に入っていくのかなと思うのですが、いかがでしょうか。

## 菊地

安西先生、いかがでしょうか。

## 安西

学部分野にまったく関係ありません。例えば、金沢学院大学は文学部系の大学ですが、今度、全学で FSP の授業を取り入れていくことになると思います。文学部の学生も将来、社会で生活していくわけですから。企業に入るかどうかは問題ではなくて、社会で暮らしていくということはどういうことなのかということ、早い時期に知っておくことが文学部で学ぶことの量になってくるといえる考え方を育てたいということです。ほかにも文学系や経済系、ほかの学部でも FSP の授業をやっているところはたくさんあります。そういうデータがたくさんありますので、後でお知らせできるかと思っています。

## 菊地

ありがとうございました。

## 質問者 5

学校種を越えた事例を聞かせていただいて、大変勉強になりました。安西先生にうかがいます。スライドの 41 番 (25 歳以上の大学入学者の割合) は、18 歳人口は減少しているけれどもまだまだ日本には勉強できる可能性のある、社会人として入って来られる学生はあるのだという、大学の可能性というところで挙げていただいたのでしょうか。また、社会人学生が入ってくる場合、初年次教育のあり方も変わってくるのか、そのあたりのことを教えていただけたらと思います。よろしく願いいたします。

## 安西

ご存じのように、就職しても 3 年経ったら 3 分の 1 は辞めるということがよく言われています。一方で、大学を卒業した後、同じ企業に同じ仕事ですっといえるということはなくなっていくと思います。そのときに、学び直しをどこでやるのかということは企業の協力も必要ですが、大学側が受け皿になる、そういう学びを提供できるのかということは、社会人にとって大きな期待だと思います。それに対してまだまだ日本の大学は応えられているかということ、日本の社会人学生の比率は 2%、OECD 諸国の平均は 20% だということはまぎれもない事実です。社会人学生という言葉は英語にはないです。このこともご理解ください。それで 25 歳以上の大学生としているわけで、社会人学生とは言わないわけです。何歳であろうと大学で学ぶことはできるはずですから。そういうことに対して初年次教育の先生方が今後どんなふうを考えていくかをぜひご指導いただければと思います。

## 菊地

ありがとうございました。では、もうお一人。

## 質問者 6

大学の初年次教育と社会の関わり、FSP の問題について意見を述べさせていただきます。論点の設定があまりにも二項対立的のような気がするんですが、安永先生も安西先生もおっしゃっていたように、先を見通す機会を与えることによって、最初の段階から 4 年間でどう過ごすかを考えるきっかけになると思います。社会に出て行くときに考え方とか、一緒になって何かをやるというときに当然繋がってくるわけです。その機会をあたえるきっかけとして両立し得るものなのではないだろうかという気がします。何かを目的としてそこだけとらえるのではなくて、その先のどこに辿りつくかを考えたうえで位置づけ

ないといけないと思います。同時に、先を見通すことの逆側で、過去の経緯を知ることでも大事だと思っています。安西先生がおっしゃたように5～10年の間に、私たちが経験したことのないような教育を受けた子どもたちが大学に入ってくるわけです。その前に私たちはどういう準備を整えて、初年次教育を考えなければいけないのかなと、今日をきっかけに考えなければいけないと思いました。

#### 菊地

ありがとうございました。私も実はかなり意図をもって誇張して対立的に示させていただきましたが、これは必ずしもそういうことではないとも思っています。一見、ベクトルはかなり違うのですが、これから初年次教育で社会との関わりを深く考えるきっかけにいただければと考えています。

#### 菊地

最後にこの論点には関わらないけれども、どうしても聞いておきたいという質問がありましたら。はい、すみません、簡潔にお願いいたします。

#### 質問者7

今日は初等中等・高等教育の方が登壇していらっしゃるのですが、せっかくの機会ですので初等中等教育の先生方が大学初年次教育に何を期待されるかということ五十嵐先生と小島先生に簡単に話していただければと思います。

#### 五十嵐

私は、大学は最先端の学問を学ぶすてきな場所であるべきだと思います。分野にかかわらず、学問を教えてくれる知識と独特の方法があるはずなのでそれを極めて、学生がその学問に1日5時間ぐらい没頭する体験ができる大学教育が必要だと思います。そのためには、大学は企業に就職するための過程という発想を変えることです。大学教育で、外部の方を入れながら、改めて自分の専門性を確認するような機会をどんどん取ってほしいと思います。これからどんどん新しいことを学んだ学生が入ってくるとは思います。教育の分野では、教師の役割も変わるとは思います。この先は子どもと共に学んでいく、先はどうなるか分からないですが、安心・安全なコンフォートゾーンに片足を置きつつ、もう一方の片足は先に行く、挑戦する、みんなで提案していこうという雰囲気が必要です。教育界だけでなくすべての分野もそうだと思います。社会全体に必要なだと思います。それだけ大学は大事な場だと思いますのでよろしくお願いいたします。

#### 小島

高校でやっているアクティブ・ラーニング型授業は、知識を定着させるということより、価値観が多様化している社会の中で生徒たちがどううまく対応していけるか、そのためのトレーニングであると、私は認識しています。ですから、生徒たちが初年次教育のなかで逆戻りしてしまうのではなく、大学のほうでも社会に目を向けた形で、高校からうまく接続していただき、それを伸ばしていただけるような教育をしていただけるとありがたいと思います。

#### 菊地

ありがとうございました。時間をだいぶ超過しております。最後に、これまでの議論を踏まえてご登壇の皆さまからひと言ずつコメント・提言などをいただきたいと思っています。五十嵐先生から順番にお願いします。

## 五十嵐

ありがとうございました。大学でほんとうに学ぶ経験をした学生が教師になり、その教師からほんとうに学ぶ体験をした子どもたちが教師を目指し、大学で次世代の子どもを教育していく学びを開発して現場に行く。というように、ほんとうの学びの循環が必要です。大学でもぜひ、真剣に学ぶ機会を与えてあげてください。よろしく願いいたします。

## 小島

どうもありがとうございました。二つあります。一つは、今日はお話しできませんでしたでしたが、私は講義を否定するものではありません。アクティブ・ラーニング型授業でも自分の授業でも、説明や講義は極力減らしています。でも講義は大事なものだと思っています。知識をインプットして整理してアウトプットするためには、まず講義があってしっかり知識を頭のなかに叩き込む、これはとても大事なことだと思っています。ですからそこは誤解のないようにお願いします。

それからキャリア教育に対する本校の考え方ですが、先ほどお話ししたように、社会に出てからのことを踏まえて進めています。どここの大学に何人入ったかということではないんです。学校のキャリア教育もイベント型のキャリア教育ではなく、学校全ての教育活動がキャリア教育。そのなかでも日常の教科活動を中心にしたキャリア教育を考えています。私たちはその一つとしてアクティブ・ラーニング型授業を位置づけています。どうもありがとうございました。

## 今野

大学の先生も小中高で授業をしてみるといいと思います。普段と違う生徒を目の前にしてどういう授業ができるか、それをもう一度振り返るチャンスになるとと思います。以上です。

## 安永

どうもありがとうございました。小中高大の先生方とこういう議論ができたことは、非常にうれしく思います。特に小島先生から自分たちが高校できちんとアクティブ・ラーニングができる学生を育てるので、大学でもそれを展開してくれ、と言っていただきまして、非常にうれしく思いました。どういうことかということ、逆の発想をしていたんですね。初年次教育で一生懸命アクティブ・ラーニングをやっているのです、ぜひ高校の先生やってくださいよと思っていたんですが、高校の側から大学側に対してエールをいただける時代がすぐそこまで来ているんだなあという気がしまして、非常にうれしく思いました。

今日登壇された方たちはある意味、成功事例を持っているような気がしますので、うまくいかなかった事例を視点とした議論がまたできたらいいなと思います。どうもありがとうございました。

## 安西

今日はほんとうにありがとうございました。楽しく、勉強になりました。10月31日に、五十嵐先生の平山小学校でお話させていただくことになっています。五十嵐先生の学校をはじめ、アクティブ・ラーニングを一生懸命やっておられるところ、また子どもたちが報われているようにしたいと思います。それはおそらく、未来を描いていくというふうに思いますので、みんなで一緒にやってみましょう。

どういう学び方をすれば自分がアクティブになるかは、学生一人ひとりで違ってきま

す。多様な学びも必要だと思います。FSPで必修になるとみんな同じ方法に参加しなければならないので、そうするとアクティブな学生たちがいやがる面もあるのです。それぞれの学生によってアクティブに学べる環境は違ってくると思うので、それにどう対応していくのかもアクティブ・ラーニングの大事な課題だと思います。

将来、子どもたちが報われていくような社会、時代にしていきたいと思いますので、ぜひよろしく願いいたします。どうもありがとうございました。

#### **菊地**

ありがとうございました。学校種を越えた対話、学校あるいは大学と社会との対話、あっと言う間で時間を超過して申しわけありませんでした。しかし、こうした対話をこれからも継続・発展・進化させていくことがきっとより良い未来に続いていくものと思います。

本日はご参加いただきまして、誠にありがとうございました。

以上をもちましてパネルディスカッションを終了させていただきます。